

る事あぶなき事也、おもひきる害心もあらば、いかにとぞかたぶきける、

〔平家物語六〕紅葉の事

むげに此君○高はいまだよう主の御時より、せいをにうわにうけさせおはします、去ぬるせう
あんのころほひは、御年十さいばかりにもやならせおはしましけん、あまりにこうえうをあひ
せさせ給ひて、北のぢんに小山をつかせ、ばぢかいでの、まことに色をうつくしうもみぢたるを
うゑさせ、もみぢの山と名付て、ひねもすにゑいらんあるになをあきたらせ給はず、ゑかるをあ
る夜野分はしたなう吹て、紅葉皆ふきちらし、らくえうすこぶるらうせきなり、殿もりのともの
みやつこ、あさきよめすとて、是をことぐくはき捨て、げりのこれるえだちれる木のはをば
かきあつめて、風すさまじかりけるあしたなれば、ぬいどの、ぢんにて、さけあた、めてたべけ
る、たきゞにこそしてげれ、ぶぎやうの藏人、行幸よりさきにと、いそぎ行て見るに、あとかたなし、
いかにととへば、ゑかくとこたふ、あなあさまし、さしも君のゑつしおぼしめされつるこうえ
うを、かやうにしつる事よ、ゑらずなんぢらきんごくるざいにもおよび、我身もいかなるげきり
んにか、あづからんずらんと、思はじ事なうあんじつゞけて居たりける處に、主上いとゞしく夜
るのおとゞを出させもあへず、かしこへ行幸成て、もみぢをゑいらん有になかりければ、いかに
と御たづね有けり、藏人なにとそうすべきむねもなし、有のまゝにそうもんす、天氣ことに御こ
ころよげに、うちゑませ給ひて、林間にさけをあた、めて、こうえうをたくと云詩の心をば、され
ばそれらには、たれがをしへけるぞや、やさしうもつかまつりたる物かなとて、かへつてゑいか
んにあづかりしうへは、あへてちよつかんなりけり、

〔吾妻鏡〕治承四年九月十九日戊辰、上總權介廣常催具當國周東周西伊南伊北廳南廳北輩等率
二萬騎參上隅田河邊、武衛○源朝頗曠彼遲參、敢以無許容之氣廣常潛以爲當時者、率土皆無非平相